

国際移民と社会的ネットワークの再編成

—— 滞日ブラジル人企業家を事例として ——

樋口 直人

(徳島大学総合科学部)

1. 移民の社会関係はどのように編成されるのか —— 問題の所在

社会的・政治的境界を越える現象は、時代によって振幅の激しい毀誉褒貶にさらされてきており、移民研究においても例外ではない。アングロ同調主義のような同化モデル、文化的多元主義のような一国内での多文化モデル、そしてトランスナショナリズムのような国境を越えた生活空間モデルと、研究のパラダイムが変わるごとに、移民の位置づけも変わってきた (Heisler 2000)。多文化モデルと親和性を持つ移民ネットワーク論は、1970年代から注目を集めるようになり、日本でも90年代以降都市社会学者を中心に調査が積み重ねられている (e.g. 広田 2003, 西澤 1995, 奥田 2004, 奥田・田嶋 1991, 1993, 田嶋 1998, 渡戸・広田・田嶋 2003)。

本稿はその延長線上に位置づけられるが、問題の所在を明らかにするために、先行研究の批判的検討から始めよう。「ニューカマー」に対する調査には一定の蓄積があり、なかでも奥田道大とその教えを受けた研究者は、多くの調査を積み重ねてきた。それでは、ニューカマー外国人のネットワークに関して、そうした調査から何が明らかにされたのか。都市コミュニティモデルからトランスナショナリズムへのパラダイム変化はみられるが、結論はいつも同じといってよい。居住の長期化や生活基盤の安定化にともない「越境移動のための自らのネットワークや組織形成が進んでいる」⁽¹⁾ (広田 2003: 292) と。

確かにそうだろう。そして研究が初期の段階であればそうした情報も貴重なものだろう。しかしそれは、わざわざ調査するまでもなく外国人多住地域

を一瞥すれば、すぐにわかる程度のことではないか。実際、フィールドを少しまわって話を聞けば、その類の話はそこそこで持ち出される。こうした「フィールドの常識」に装飾を施した文章を「論文」と呼ぶのが10年以上続くのは、研究の発展上好ましい状況ではない。

移民ネットワークを、「社会的・空間的境界を越境した人が持つ個人的関係の総体」とすると、前出の広田が挙げる「共振者」のようなホスト社会の住民もネットワークを構成する。だが、「エスニック・ネットワーク」と「共振者」の機能はどのように異なるのか。どちらがどの程度どのような点で重要なのか。「エスニック・ネットワーク」は、いつからどのようにして形成され、それは送り出しコミュニティから連続しているのか、移住後に新たに形成されたのか。

こうした点について、これまでの都市社会学的な研究はほとんど意味ある知見を導き出していない。勉強不足と知的怠慢がなせるぬるま湯につかり続けた結果、研究の停滞が続いている。日本の先行研究で結論とされていた「ネットワークの形成」は、研究の出発点にすぎない。それを前提とした上で、ある移民集団が持つ社会的ネットワークの性質や機能の特徴を明らかにしなければ、研究自体の意義が問われることとなろう。

本稿はこうした認識のもとで、在日ブラジル人企業家に関する調査データに基づき、彼女ら彼らの持つ社会的ネットワークの特徴を再考する。そのため、まず関連する先行研究を検討し、データ解釈のための枠組みを提示する（2節）。次に、在日ブラジル人企業家に対するインタビューデータから、彼ら彼女らがどのような社会的紐帯をビジネス設立に生かしているのかをみていく（3節）。ここでは特に、予定調和的な移民ネットワーク論の描く像からは距離をとり、移民がエスニック・ビジネス設立にあたって依存する人的つながりを、「社会的ネットワークの再編成」という観点から検証したい。その上で、社会関係の再編成が起こる要因を分析し、知見の一般化に関しても一定程度議論する（4節）。

2. 社会的ネットワークと社会的資本

2-1 移民と社会的ネットワーク——孤立から連帯へ

移民と社会的ネットワークについては、大きく2つの立場がある。すなわち、社会的ネットワークを剥奪され孤立した存在として移民をみるものと、移民後も社会的ネットワークが維持され重要な役割を果たすとするものである。前者の代表的な例として、ハンドリンの『根こぎにされた人々』を挙げておこう (Handlin 1951)。そこで移民は、まったく新しい環境で出身地との紐帯を切断され、孤独で不安にさいなまれる存在として描かれている。

社会学でこれに近い立場をとったのは、シカゴ学派の都市社会学であった。彼らの図式では、個人は社会的規制から自由になる一方で、共同体を喪失し行動指針を失って逸脱やモラルの低下がもたらされる (Wirth 1934 : 12-3)。パークが移民の社会関係についてもっとも手厚く記述した『移植された旧世界の特徴』をみても、一次的集団の解体と逸脱の増加を移民の特徴としている (Park and Miller 1921 : 60-1)。

ただし、シカゴ学派の議論はハンドリンほど明快なものではなく、各論レベルまで社会解体論的な基調が浸透しているわけではない。上に引用したパークらの本のなかでも、別の箇所では連鎖移民の多さと出身地別に細分化された居住パターン、相互扶助制度の存在を指摘している (Park and Miller 1921 : Ch.6)⁽²⁾。しかし、こうした事例を豊富に紹介しながらも、シカゴ学派の議論が社会解体論の範囲を外れることはなかった。

このように事例と一貫しないシカゴ学派の枠組みに対して、移民ネットワーク論の立場から異を唱えた重要な論考として、若かりし頃のティリーらの論文がある。彼らは、「パークの亡霊」が跋扈する研究状況を批判しつつ、『ストリート・コーナース・ソサエティ』などに依拠して以下のように述べる。「都市において広範な個人的関係が実際広くみられると考えるならば、移住から個人の解体、社会解体へと至るような道筋は、実際にはかなり希であると結論できる」 (Tilly and Brown 1967 : 140)。

都市人類学の発展、1965年の米国移民法改正以降の移民に関する実証研究

の増加などもあり、移民研究は解体モデルから連帯モデルへと転換していく。移民は出身文化・社会から「根こぎ」(uprooted)にされたのではなく、むしろそれを「移植」(transplanted)して持ち込んだのだ、とする見方は米国移民史で特に明確に示される。その1つがボドナーの研究であり、ここでは連鎖移民を支える社会制度の発達と紐帯の持続が強調される(Bodnar 1985)。さらに、オスターグレンによる精緻な歴史地理学的研究は、スウェーデンからの移民が出身地と移民先をつなぐ親子コミュニティを形成していたことを明らかにした(Ostergren 1988)。

現代の移民については、マッシーらが膨大なデータに基づいて、メキシコとアメリカを結ぶ親子コミュニティの形成過程を実証した(Massey et al. 1987)。彼らの網羅的なデータ分析によると、初期には特定のコミュニティから米国各地に分散していた移民は、移住過程の進展とともに特定の都市に集中する。これは、移民が出身地と緊密な関係を保持し、連鎖移民により受入国の特定の都市に出身地との「親子コミュニティ」を築くからである。親子コミュニティの間では絶えず移民が出入りし、米国生まれの「同郷者」も珍しくない。このように分家したコミュニティが米国に深く根を下ろすことにより、米国への移民を支える構造が確立することとなる(その意味で、移民ネットワーク論は移住先での適応にとどまらない、ナショナルな枠を越えた視点も含む)。

ここで移民は家族・親族、同郷者との紐帯を保つ行為者であり、連鎖移民論のように移民ネットワークを主要な説明変数として移民の行動を説明する研究が増加する⁽³⁾。ネットワークは、移民にとって住居や職や情報、はたまた精神的安寧の供給源であり、ホスト社会での短期的な適応を促進する(Gurak and Caces 1992)。さらには、移民の出身地と移民先が社会的ネットワークで結ばれていることが、大規模な移民現象の必要条件であるという議論もなされるようになる(樋口 2002a, 2002b)。ここに至って、孤立した移民像は完全に否定され、ネットワークに統合された行為者として移民をみることが広く前提として共有される。

しかし、ネットワークとひとくくりにして論じても、それで明らかになる

ことはそれほど多くない。そして現実には、ネットワーク形成の経緯はさまざまである。たとえば、日本からペルーへの移民がビジネスを始めるにあたっては、家族や同郷といった出身地から継続するネットワーク、県人、「同航海同耕地」を契機とする知己、同業組合といった移住過程で形成されたネットワークの双方が動員されていた（赤木2000）。

これまでの研究をみると、ネットワークの機能については細かな議論がなされてきた一方で、ネットワーク形成の経緯が問題とされることはほとんどなかった⁽⁴⁾。赤木が指摘したようなネットワークの多様性を把握し、「ネットワークが形成されている」という単調な結論から抜け出るためには、以下のような問題設定が必要になる。ネットワークはどのようにして作られ、それぞれのネットワークはどのような点で重要なのか。

2-2 エスニック・ビジネスと社会的資本⁽⁵⁾

本稿で検証の対象とするエスニック・ビジネスに関する研究は、1970年代から本格的に始まった。当初は、儒教的勤労倫理のような文化的要因と労働市場からの排除を主要な説明変数として、ビジネスの形成を説明する議論が主流だったといえるだろう。それが近年では、産業構造の変動のようなマクロな機会構造、あるいは移民同士の社会的ネットワークに注目する研究が支配的となっている（Light and Gold 2000, Portes 1995, Waldinger et al. 1990）。本稿との関わりでいえば、移住してから起業に至るまでの局面で社会的ネットワークが果たす役割に焦点を当てた研究蓄積を多く持つ。

ここで社会的ネットワークは、「ネットワークその他の社会構造に帰属することを通して得られる利益を確保する能力」である社会的資本の供給源となる（Portes 1995）。エスニック・ビジネスに関する研究では、家族・親族、友人ネットワークという下位類型がしばしば用いられる（e.g. Min 1988, Portes and Bach 1985, Yoon 1997）。しかしこうした研究にあっても、すべてのネットワークを一緒くたにして「ネットワークがビジネスにとって重要である」という予定調和的な結論が導かれる例が多い。

それに対して、ネットワークの下位類型ごとに供給する社会的資本が異な

るとする研究もある (Yoo 1998)。そこでの調査結果をみると、韓国から米国に持ち込まれた「家族ネットワーク」は、「強い紐帯」として資金調達に大きな役割を果たすが、情報提供の機能は弱い。それとは対照的に、移住後に作られた教会や大学の同窓会でのつながりといった「社会的ネットワーク」は、資金提供には役立たないが、情報提供における役割は際立って大きい。これはまさに「弱い紐帯の強さ」を示す興味深い結果だろう。

しかし、それでもなお明らかにされない点が残る。すなわち、出身地から持ち込まれるのは家族ネットワークだけで、社会的ネットワークは持ち込まれないのか。ネットワークはどの程度まで越境して、どの程度まで移住後に形成されるのか。こうしたネットワークの質の相違は、移民集団が動員する社会的資本に何らかの相違をもたらすのか。

2-3 分析枠組み

以上のような問いに答えるには、ネットワークの形成局面と形成されたネットワークの機能に関して、より詳細な検討が必要になる。本稿では、在日ブラジル人がビジネス設立時に動員した社会的資本のデータから、具体的に検証していきたい。ブラジル人が企業にあたって利用した社会的資本をみることで、起業時に道具的有効性を発揮した社会的ネットワークを明らかにできる。しかしその前に、前段の議論をもとに分析枠組みを提示しておこう。

①ネットワークの起源について

ネットワークを分節化するにあたって、移住前と移住後という形成の経緯をまず分けておく。そこで問われるのは、移住によりネットワークの質量がどのように変わるかという点である。一方では、家族、親族、ブラジルでの同郷者・友人・同僚といったブラジルから持ち込まれたネットワークがあるだろう。他方、日本に移住してからの近隣・同僚、日本人など、来日後形成されたネットワークもある。これらそれぞれの質と量に関して、以下のような仮説を立てることができる⁽⁶⁾。

国際移民と社会的ネットワークの再編成

- (a) 解体仮説：在日ブラジル人は、移住により社会関係の多くを喪失し、日本でも新たな社会関係を築くに至っていない。そのため、彼らは孤立し人からの助力を得ることなく生きていかねばならない。ビジネス設立にあたっては、社会的ネットワークの動員は限定的であり、他者からの助力を受ける程度が低い。ウェルマンのいう喪失仮説であり、初期シカゴ学派的な行為者像に該当する。
- (b) 維持仮説：ブラジルからの社会関係は、日本に移住後も維持される。移民ネットワーク論が示唆したように、同郷者の呼び寄せにより日本にも親子コミュニティが形成され、ブラジルでの知己が重要なネットワーク資源となる。ビジネス設立にあたっては、ブラジルから持ち込まれた社会関係が重要な役割を果たす。
- (c) 再編成仮説：ブラジルからの社会関係をみると、日本に移住してから維持されるものと放棄され新たに構築されるものとが併存する。日本で選択的に社会関係を再編成し、ビジネス設立時においても、多様な社会関係のなかから目的に応じて有用なネットワークを動員する。

②ネットワークの機能について

ビジネス設立におけるネットワークの機能については、「経験」（ビジネスに必要な職業訓練）、「情報・信用」（ビジネスのノウハウや保証人の調達）、「金銭」（経済的資本の調達）の提供として分類できる（Bailey and Waldinger 1991, Min 1988, Yoo 1998）。そのうえで、「強い紐帯」と「弱い紐帯」ごとの機能を以下のように仮説化しておく（Granovetter 1973）。

- (a) 強い紐帯の機能に関する仮説：形成されてからの期間が長く退出するのが難しい、家族・親族のつながりが、強い紐帯として考えられる。強い紐帯は、経済的資本の調達にあたって重要な役割を果たす。しかし、家族ネットワークは密度が高い一方で均質で閉鎖的なため、経験や情報・信用といった資源へのアクセスには意味を持たない。
- (b) 弱い紐帯の機能に関する仮説：弱い紐帯としては、日本で知り合った友

人や日本人が挙げられる。ポルテスらは (Portes and Stepick 1993), マイアミのキューバ人コミュニティにおいて退出オプションをとりにくいがゆえに強制力を持つ信頼を提供するとしているが, 在日ブラジル人は日本での流動性が高く定着志向も弱い。そのため, 常に関係からの退出オプションが存在し, 日本で形成された紐帯は弱いものと考えられる。弱い紐帯は, 金銭の提供には資するところが少ないが, 異質な者同士を結びつけることにより, 経験や情報・信用の提供には動員されやすい。

3. エスニック・ビジネスにおける資源動員と社会関係

3-1 データと方法

本稿で用いるデータは, 1997年4月~11月に行なった78人のブラジル出身企業家に対するインタビューをもとにしている⁽⁷⁾。必要な項目について再度確認が必要な場合については, 電話でさらに聞き取りを行った。

経営者の学歴をみると, 大学中退以上が4割とかなり高く, ブラジルでの自営業経験がある者も43% (33人) にのぼる。したがって, 人的資本がかなり高い人たちが日本でビジネスを営んでいるとみなすことができる⁽⁸⁾。だが, 人的資本にはこれ以上ふれない。問題はそれぞれの企業家がビジネスを始めるにあたって, どのような社会的ネットワークが社会的資本を供給したかである。

インタビュー回答者のうち, ブラジルから資金を持ち込んだのは3人しかいなかった。必要な資金のほとんどは, 日本で蓄積されている。ブラジルから持ち込まれたのは, 学歴とビジネス経験という人的資本であり, それに加えてネットワークという社会的資本がどのように持ち込まれたかが検討課題となる。

3-2 ブラジル人企業家の社会的資本

① ネットワークの性質について

(a) 解体仮説

まず、表1をみてもらいたい。ネットワークを「ブラジルからの友人」「日本で知り合った友人」「家族」（直系家族及びキョウダイ）「親族」「日本人」に分けて、ビジネス設立時における貢献の度合いを示している。「金銭」「経験」「情報・信用」のそれぞれについて、「助力を受けた」という回答を足し合わせたのがそれぞれのポイントになる。

表1 ビジネス開始時における社会的資本の供給源

貢献ポイント	日本で知り合った友人		ブラジルからの友人		日本人		家族		親族	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
0	37	47.4	69	88.5	40	51.3	39	50.0	72	92.3
1	25	32.1	6	7.7	28	35.9	32	41.0	6	7.7
2	13	16.7	3	3.8	7	9.0	7	9.0	0	0.0
3	3	3.8	0	0.0	3	3.8	0	0.0	0	0.0
合計	78	100.0	78	100.0	78	100.0	78	100.0	78	100.0
平均	0.63		0.14		0.59		0.53		0.10	

インタビューで、「誰の助力も受けていない」と答えたのは、すなわち表1ですべてのネットワークについて0を示したのは78名中4名にすぎない。ほとんどの企業家はネットワークを動員して何らかの助力を他者から受けており、5つの行為者類型から助力を受けたポイントの平均は1.7であった。その意味で、企業家の事例をみる限り解体仮説が支持されているとはいえない。ただし、在日ブラジル人全体のなかで企業家がネットワークにとりわけ恵まれた層である可能性は排除できず、この結果は暫定的なものである。

(b) 維持仮説

表全体から明瞭に読み取れるように、日本で知り合った友人、日本人、家族の貢献が高く、半数の企業家がそれぞれから何らかの助力を得ている。一方、ブラジルからの友人と親族の貢献度は低く、約9割はなんらの助力も受

けていない。これを当初の維持仮説に照らし合わせてみると、両義的な結果を示す。というのは、家族ネットワークが起業にあたって有効に機能しているのに対し、ブラジルからの友人と親族のネットワークがほとんど機能していないからである。移民ネットワーク論が想定する同郷者のつながりは、以下が典型的なものである⁽⁹⁾。

浜松でレストラン等を営む41歳の男性であるホセの例。91年に来日し工場で働いていたが、94年夏に不況で解雇された。ちょうど同じ時期に、ブラジルでハンバーガーショップを共同経営していた友人2人も解雇され、職もないので3人で再びビジネスを始めることにした。浜松で手広くビジネスをしていたブラジル人に情報提供を受け保証人になってもらい、95年3月に1000万円を投じて食料品店を開いた。しかし、食料品店は在庫が売れて現金が入るのに時間がかかって資金の回転が苦しいため、夏からは日銭の入るレストランへと転業した。

しかし、こうした例が実際には少ないことは、すでにみたとおりである。強いていうならば、情報や信用の供与に関してブラジルからの友人が一定程度の役割を果たしているくらいだろう。次に紹介する親族ネットワークが機能する事例はさらに少ない。

大泉町でパソコン教室を営む33歳のドイツ系男性であるアレックスの例。妻は日系三世で、93年に一緒に来日。もともとシステムエンジニアをしており、ブラジルに帰国してパソコン教室を開業しようと考えていた。が、97年に一時帰国して様子をみたらブラジルではコンピュータ学校が乱立しているため、開業は難しいと思った。そのため、予定を変更して日本で開業することにした。岐阜県で働いていたが、大泉町で美容院を営む妻の従姉妹を頼って大泉に転居して保証人になってもらった。

(c) 再編成仮説

以下でみるマルコスは、日本人から経験と情報・信用を、家族から資金を調達した例である。日本人の経営する店で経験を積み、保証人には日本人に

なってもらい、さらに夫婦の貯金を合わせて開業資金として投入するがゆえに、早く開店できたという。

浜松で食肉店を営む40歳の男性であるマルコスの例。91年に来日し、2年間建設業で働いた。それから2年間、日本人の経営するブラジル食品店で妻と一緒に働いた。ここで働く2年間で店長になり、夫婦賃金が同額だったこともあり、開業資金のほとんどをこの時期に貯めた。店長時代に知り合いを顧客とした宅配サービスを始めており、その延長として600万円を投じて店を始めた。日本人に店の保証人になってもらった。

一方サンドラは、日本で知り合った友人と家族から資源を調達している。

湖西市で食料品店を営む23歳の女性であるサンドラの例。父親は1990年から豊田市で働いており、本人を含む残された家族も93年に来日するが、家族合流ではなく出稼ぎのために来日したため、豊橋のスズキの工場で2年働いた。その後、アパートの一室でブラジル人が営む食料品店で働き、そこでの経験がビジネスに役立った。そこで一緒に働いていたファビオ、父親と同じ工場で6年間一緒に働いていたマリオと3人で、96年4月から店を始めた。そのときかかった500万円の初期投資のうち、父親が150万円出資してくれた。知り合いの日本人業務請負業者に部屋の保証人になってもらった。

比嘉俊行は、沖縄出身の一世でブラジルでもスーパーマーケットを営んでいたことから、もともと自営志向が強かった。一家で日本に出稼ぎに来ていたことから、家族労働力も豊富であり、弁当屋を家族だけで営むことも可能となる。

湖西市で弁当屋を営む49歳の男性である比嘉俊行の事例。90年に来日して工場で働いていたが、妻がパートで働いていたブラジル人向け弁当屋兼レストランから、事業売却の話を持ちかけられ、2日で決断して家族で弁当屋を始めた。最初は、引き

継いだ店のあった浜松市内で営んでいたが、レストランには波があり利益率が低いので、毎日工場に決まった数を配達する弁当屋だけに切り替えた。ブラジル食料品店を営む日本人業者に食料品店としての名義を借りているが、完全に独立して営業している。

ネルソンは、同僚と副業としての休日移動販売から始めている。一般に工場で知り合った同僚は、日本で貴重な社会関係を提供しうる。同僚以外には、ディスコで知り合った例などが挙げられていた。

浜松市で食料品店を営む29歳の男性であるネルソンの事例。91年に来日して工場と同僚になり知り合ったマルコスと、93年4月に食糧の移動販売を始めた。移動販売なので、開業資金は60万円しかかからない。その後、店を2軒構えるまで事業を拡張し、96年3月には自分が店舗部分を、マルコスが貿易・卸売り部分を分ける形でそれぞれが独立して営業するようになった。

このようにみえてくると、出身地でのネットワークは家族を除いて維持されていないことがわかる。しかし、多くの企業家は日本で新たにブラジル人の友人をみつけ、そして何らかの助力をする日本人との知己も得ている。その意味で、再編成仮説を支持する結果だといえる。

②ネットワークの機能について

ブラジル人企業家のネットワークが、ブラジルからそのまま持ち込まれたわけではなく、日本で再編成されたものであるとすれば、その機能はどのようになっているだろうか。そこで、企業家が得た助力の質を示したのが図1である。このうち、情報・信用が合計87ポイントと平均1を超えてもっとも多く動員されている。それに続いて金銭が67ポイント、経験が22ポイントとなっており、日本で同種のビジネス経験を経て企業家になる者が3割程度であることを示す。だがここでは、ネットワークごとの特徴に焦点をあてて、それぞれの機能をみていこう。

国際移民と社会的ネットワークの再編成

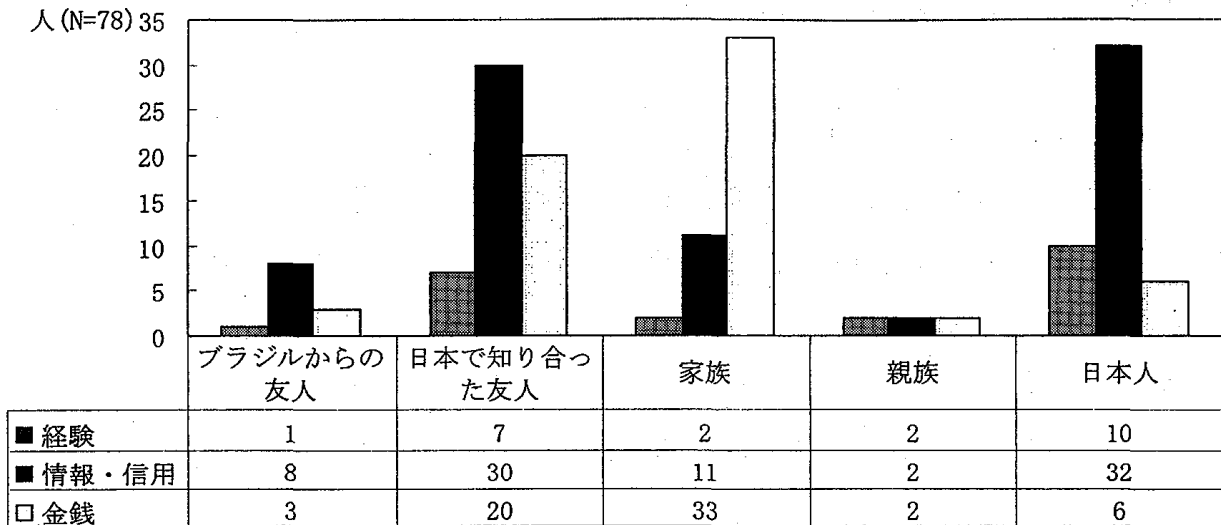


図1 ビジネス設立に当たっての助力

(a) 強い紐帯の機能に関する仮説

強い紐帯は金銭提供機能が強いという仮説は、家族に関してはかなりの程度該当する。家族は資金供給源でもっとも多くを占めていた。家族において経験と情報・信用機能が金銭に比べて弱いことも、仮説どおりの結果となっている。

しかし、家族よりは弱いが退出オプションが少ないという意味で強い紐帯である親族、ブラジルからの友人については、機能自体の弱さが目立つ結果となった。そのなかで資金調達の機能が目立つわけでもない。仮説通り、情報伝達機能が強いわけでもない。ブラジルからの友人は、以下のような形で情報提供をすることもあるが、これはむしろ例外に属する。

大泉町でレンタルビデオ店を営む33歳の男性であるフェリックスの例。妻は90年に、本人は91年に来日して工場で働いていた。大学時代の友人が、現在の店の近所でソフト会社を経営しており、ビジネスを始める時に手続きやノウハウを教えてくれた。妻と貯金した500万円を投じてレンタルビデオ店を始めた。

企業家のデータをみる限り、家族の紐帯は維持されている。一方、親族とブラジルからの友人という2つのネットワークは、移住過程においておおむ

ね切断されたものと考えたほうがよい。

(b) 弱い紐帯の機能に関する仮説

弱い紐帯とされたもののうち、日本人は情報・信用をもっとも多く提供している点で仮説に適合的な結果となっている。特に、保証人が必要なときに日本人に依頼することが多い。日本人は、さらに経験の機会についても最大の提供者となっている。この点も、異質な資源を持つ弱い紐帯の強さをあらわしているといえよう。以下は、親族が経験を提供して日本人が情報・信用を提供する例である。

厚木市でレストランを営む31歳の男性であるバルデスの例。92年に叔父の営む新聞社で働くために来日。その後、貿易のほうが自分に向いていると思い、同じく叔父が営む貿易会社で働いていた。そこで厚木市青年会議所の国際交流委員会にも関わるようになり、独立する時には青年会議所の人に開業のノウハウを教えてもらったり、不動産屋を紹介してもらったりした。叔父の援助は受けず、すべて自分の資金で始めた。

一方、日本で知り合ったブラジル人は経験と情報・信用で日本人に次ぐ位置を占めており、弱い紐帯仮説に適合的な結果を示す。しかし、金銭についてみると家族には及ばないものの、他のネットワークを大きく引き離して提供者となっていることがわかる。名古屋市でレストランを営む35歳の男性であるフェリーチェの場合、すべて日本で形成されたネットワークを動員している。

名古屋市内の教会に集まる仲間で、月に1回パーティーを教会ですていた。そのときに参加していた日本人が、料理を食べておいしいからレストランを始めたらどうかと話を持ちかけてきた。開業資金は1000万円かかったが、その日本人が貸してくれて教会の仲間4人で開業した。

4. 考察と結論

4-1 日本で再編成される社会的ネットワーク

このようにみていくと、ネットワークの性質に関して強力に支持されたのは再編成仮説であることがわかる。家族は重要なネットワークとして社会的資本を提供していたが、親族とブラジルからの友人はほとんど機能していなかった。その一方で、経験と情報・信用で家族をはるかにしのぐ社会的資本を提供したのは、日本人と日本で知り合ったブラジル人であった。日本で知り合ったブラジル人は、共同経営などを中心として資金提供という点でも家族に次ぐ役割を果たしている。

再編成仮説が支持される理由は、このような新たな社会関係が有効な資源になったという側面のみによるのではない。日本で知り合った友人と日本人が経験と情報・信用を提供し、家族と日本で知り合った友人が金銭を提供するという点において、性質の異なる紐帯を目的に応じて選択しているからである。前述のように、家族は強い紐帯で結ばれているがゆえに、金銭の提供のような高度な信頼を必要とする助力を期待できる。一方、日本人との紐帯は弱いといえるだろうが、日本社会でビジネスを始めるのに必要な信用の提供において、異質な紐帯であるがゆえに貴重なものとなる。さらに、日本で知り合った友人は、その中間にあってすべての点で重要な役割を果たしうる。結論的にいえば、企業家たちはブラジルでの社会的ネットワークのうち、おおむね家族のみを重要なものとして維持していると考えられる。

その一方で、紐帯の強弱に関する仮説は、一定の修正を迫られる。ワーブナー（Werbner 1990）は、親族や同郷の友人といったパキスタンから移植された社会的ネットワークを閉鎖的な強い紐帯として、イギリスで形成された近隣・職場関係に基づくエスニック・ネットワークを弱い紐帯として描いたが、ブラジル人には該当しない。親族や同郷の友人は、移住過程のなかで弱い紐帯として切断され、移住後はむしろ日本で知り合った人たちを通して機会を認知し、資本を獲得していった。

強い紐帯についてみると、家族ネットワークはほぼ仮説どおりの機能を示

す。資金調達のような高度な信頼が要求される社会的資本は、強い紐帯から提供される。その一方で、経験や情報・信用のような行為者の異質性が資本をもたらす場合には、家族の貢献は大きいものではない。その一方、ブラジルでの友人や親族といった関係は、日本では維持されず解体した。その意味で、ブラジルでの友人や親族は、在日ブラジル人にとっては弱い紐帯でしかない。この点で、従来の移民研究とは異なる知見が得られた。

弱い紐帯に関しても、日本人ネットワークは仮説どおりの結果となった。日本人は、保証人になりうる信用や日本のビジネスに関わる制度など、ブラジル人にはない資源を多く持つ。強い紐帯と異なり資金面での助力は少ないが、ブラジル人同士では調達が難しい社会的資本の供給源となっている。経験についても、日本で資金をためなければならぬブラジル人に比べると、日本人の方が起業自体は簡単であることにより、ブラジル人企業家が経験を積む場となっている。

日本で知り合った友人の場合、すべての面にわたって有力な資本供給源となっている。これは、経験や情報・信用といった弱い紐帯に関しては仮説どおりの結果であるが、金銭のような強い紐帯でなければ調達が難しい資本も提供していることを示す。

4-2 結論

今回の結果から、暫定的な結論と今後の研究課題を2点導くことができる。

第1は、エスニック・コミュニティの表面的な様相に関わる。浜松や大泉といった集住都市では、「リトル・ブラジル」と呼ばれうるエスニック・ビジネスや学校、宗教、サッカークラブ、文化クラブなどの社会制度が作られている。しかし、同じ社会制度が作られたとしても、それは同じ社会関係が再現されて作られたとは言い難い。本稿のデータからは、移住後にも維持されたのは家族内のネットワークにとどまっており、それより弱い紐帯は機能していない。

したがって、社会制度自体はブラジルにあったものの再現を企図したと

いっても、それを支える人的なネットワークは、ブラジルとは連続しておらず、新たに再編成されている⁽⁴⁾。その意味で、ネットワークが発達しているという単純な議論では、ブラジル人がネットワークの組み替えを行う過程は明らかにできない。居住人口の増加は、呼びよせを通じて移植された社会的ネットワークの累積をもたらさなかった。代わって、新たな環境で新規に接触可能な人口量の増大を通じて、企業家の誕生に必要な社会的資本を蓄積するのだろう。

第2は、本稿の知見の一般化に関わる。北米でのエスニック・ビジネス研究は、エスニックな紐帯が出身地から持ち込まれたものか、新たに形成されたものかを調査項目に入れていない。そうした点にふれた数少ない研究として、ワーブナー (Werbner 1990) によるパキスタン系イギリス移民の人類学的調査を再び挙げておこう。これによると、パキスタンとイギリス間で親子コミュニティが成立し家族・親族や同郷出身者との絆は閉鎖的で強固な一方で、第二世代になると学校や近隣といったイギリスで構築されたネットワークが重要になる。

しかしグリエコ (Grieco 1998) によれば、フィジーのインド系移民は当初、契約移民としてブラジル人に類似した形で渡航した。それゆえ、移動は連鎖移民のような相互扶助型のものではなく、個人を単位として斡旋組織が媒介する形をとっている。その結果、フィジーでのインド系コミュニティにおける社会的ネットワークは新たに作り直され変化するという。

この両者を念頭においていえば、ブラジルから日本への移住過程は個人または家族単位であるものの、それより広い範囲のネットワークは関与していない。これは筆者が以前論じたように、在日ブラジル人が北米型とは異なる市場媒介型移住システムに支配されてきたことによるものと思われる。すなわち、市場媒介型移住システムが発達した移住過程にあって、社会関係はブラジルから連続したものとはなりにくく、親子コミュニティもできにくい(樋口 2002a, 2002b)。

これらの研究は、移住システムの相違が移住先での社会的ネットワークの相違を生み出すことを示唆するが、これは在日ブラジル人以外にも該当する

のか。すなわち、彼ら彼女らによる社会的ネットワークの再編成という結果は、このような移住システムの特質に規定されたものなのか。家族以外に出身地から連続した社会関係を剥奪されたがゆえに、より「弱い紐帯」であっても再構築しなければならなかったのか。あるいは、社会関係は必ずしも連続したものではなく、ある程度普遍的に再編成されるといえるのか。社会的ネットワークの維持－解体－再編成の位相が複数ありえることについては、ここでその一端を示すことができた。しかし、それを決定するメカニズムについては、多くの共時的・通時的な比較研究が必要になる。

これらの知見をまとめていえば、社会制度の再現をもって移民コミュニティが再現されたと考えるのは適切ではない。そこで社会的ネットワークがどのように再編成されたのか、その動態をみていく必要がある。表面的な観察からネットワークやコミュニティの形成を謳うのでは、その底脈をなすダイナミズムや変差を見逃すことになる。ネットワークやコミュニティの形成原理や形成条件自体を説明対象とするような実証研究の蓄積が、今後の検証にあたって必要になるだろう。

【注】

- (1) 筆者自身、こうした先行研究に何の疑問も持たずに移民ネットワーク・パラダイムとでもいうべき前提を共有し、96年から在日ブラジル人のネットワークに関する調査を開始した。しかし、内外の移民ネットワーク論やエスニックな連帯モデルを援用した調査を続けるうちに、疑問を感じるようになったことが本稿の執筆動機となっている。
- (2) トマスとズナニエツキの『ポーランド農民』も、パークらの研究の先駆けとして位置づけられるだろう。彼らの図式でも同様に、移民ネットワークの機能を指摘しつつも、「遷移地帯」に集住する移民は、伝統的紐帯を失ってアノミーに陥るか、メインストリームの社会に同化吸収されることが前提となる。『ポーランド農民』の原著は2000ページにも及ぶ大著であるが、翻訳は分量にして10分の1程度の部分訳しか出ていない。筆者は原著未見のため、その学説史的な位置づけに関するコメントは差し控えたい。
- (3) 人類学においては、戦後の農村都市間移動の増大により始まった移民研究が、1970年代になって急速に発展した (Brettel 2001, Graves and Graves 1974)。

近年の人類学的な移民研究をみると、小集団を対象とした密着型のエスノグラフィが多い点でサーベイ重視の社会学とは異なるものの、相違点よりも共通点の方が目立つ。

- (4) 例外的にマッシーらは、移住を促進するネットワークを分節化して議論しているが (Massey and Epstein 1997), 移住後の適応局面に関しては後述のような研究しかないといってよいだろう。
- (5) Social Capital は社会関係資本と訳されることが多いが、ここでは人的資本との対比で用いる文脈を重視するため、社会的資本と訳しておく。
- (6) 仮説の設定にあたっては、フィッシャー (Fischer 1975, 1982, 1995) とウェルマン (Wellman 1979) の議論を参照している。
- (7) データと結果について詳しくは、樋口・高橋 (1998, 1999) を参照。ただし、これらの論文で用いたデータに加えて2件の聞き取りを行い、さらに無効票を1票除外したものが、本稿で用いる78件の内訳となる。
- (8) 労働者調査は、1998年2～3月にかけて企業家調査とは別に行われた。業務請負業で働く労働者2054人から回答を得ており、そのうち大学中退以上は18.9%だった。
- (9) 以下で登場する企業家はすべて仮名である。
- (10) 本稿では、家族を唯一継続型の社会関係として捉えたが、これは人類学のように家族関係を細かく分析するのではなく、家族を大まかなカテゴリーとして捉えたことによると思われる。家族関係にも恐らく移住によって新たな編成が生まれ、変化しているだろう。

【文献】

- 赤木妙子, 2000, 『海外移民ネットワークの研究——ペルー移住者の意識と生活』
芙蓉書房出版。
- Bailey, T. and R. Waldinger, 1991, "Primary, Secondary and Enclave Labor Markets: A Training Systems Approach," *American Sociological Review*, 56: 432-445.
- Brettel, C. B., 2000, "Theorizing Migration in Anthropology," C. B. Brettel and J. F. Hollifield eds., *Migration Theory: Talking Across Disciplines*, New York: Routledge.
- Fischer, C. S., 1975, "Toward a Subcultural Theory of Urbanism," *American Journal of Sociology*, 95: 1319-1341.
- , 1982, *To Dwell among Friends*, Berkeley: University of California Press.
- , 1995, "The Subcultural Theory of Urbanism: A Twentieth-Year Assess-

- ment," *American Journal of Sociology*, 101 : 543-577.
- Granovetter, M., 1973, "The Strength of Weak Ties," *American Journal of Sociology*, 78 : 1360-80.
- Graves, N. B. and T. D. Graves, 1974, "Adaptive Strategies in Urban Migration," *Annual Review of Anthropology*, 3 : 117-151.
- Grieco, E. M., 1998, "The Effects of Migration on the Establishment of Networks : Caste Disintegration and Reformation among the Indians of Fiji," *International Migration Review*, 32 : 704-736.
- Gurak, D. T. and Fe Caces, 1992, "Migration Networks and the Shaping of Migration Systems," M. Kritz et al. eds., *International Migration Systems : A Global Approach*, Oxford : Clarendon Press.
- Handlin, O., 1951, *The Uprooted : The Epic Story of the Great Migrations That Made the American People*, Boston : Little Brown (reprint ed).
- Heisler, B. S., 2000, "The Sociology of Immigration : From Assimilation to Segmented Integration, from the American Experience to the Global Arena," C. B. Brettel and J. F. Hollifield eds., *Migration Theory : Talking Across Disciplines*, New York : Routledge.
- 樋口直人, 2002a, 「国際移民におけるメゾレベルの役割——マクロ・ミクロモデルを超えて」『社会学評論』52(4) : 76-90.
- , 2002b, 「国際移民の組織的基盤——移住システム論の意義と課題」『ソシオロジ』145 : 55-71.
- ・高橋幸恵, 1998, 「在日ブラジル出身者のエスニック・ビジネス——企業家供給システムの発展と市場の広がりを中心に」『イベロアメリカ研究』20(1) : 1-15.
- , 1999, 「ブラジル人コミュニティの制度的基盤——エスニック・ビジネスの担い手たち」『トランスナショナルな環境下での新たな移住プロセス——デカセギ10年を経た日系人の社会学的調査報告』科学技術振興調整費報告書.
- 広田康生, 2003, 『新版 エスニシティと都市』有信堂.
- Kim, K. -C. and W. M. Hurh, 1985, "Ethnic Resources Utilization of Korean Immigrant Entrepreneurs in the Chicago Minority Area," *International Migration Review*, 19 : 82-111.
- Light, I. and S. J. Gold, 2000, *Ethnic Economies*, San Diego : Academic Press.
- Light, I. I. -J. Kwuon and D. Zhong, 1990, "Korean Rotating Credit Associations in Los Angeles," *Amerasia Journal*, 16 : 35-54.

- Marger, M. N., 1989, "Business Strategies among East Indian Entrepreneurs in Toronto: The Role of Group Resources and Opportunity Structure," *Ethnic and Racial Studies*, 12: 539-563.
- Massey, D. et al., 1987, *Return to Aztlan: The Social Processes of International Migration from Western Mexico*, Berkeley: University of California Press.
- and K. E. Epinosa, 1997, "What's Driving Mexico-U.S. Migration?" *American Journal of Sociology*, 102: 939-999.
- Min, P. G., 1988, *Ethnic Business Enterprise: Korean Small Business in Atlanta*, Staten Island: Center for Migration Studies.
- 西澤晃彦, 1995, 『隠蔽された外部——都市下層のエスノグラフィ』彩流社.
- 奥田道大, 2004, 『都市コミュニティの磁場——越境するエスニシティと21世紀都市社会学』東京大学出版会.
- ・田嶋淳子編, 1991, 『池袋のアジア系外国人』めこん.
- , 1993, 『新宿のアジア系外国人』めこん.
- Ostergren, R. G., 1988, *A Community Transplanted: The Trans-Atlantic Experience of a Swedish Immigrant Settlement in the Upper Middle West, 1835-1915*, Madison: University of Wisconsin Press.
- Park, R. E. and H. A. Miller, 1921, *Old World Traits Transplanted*, New York: Harper and Brothers (reprint ed.).
- Portes, A., 1995, "Economic Sociology and the Sociology of Immigration," A. Portes ed., *The Economic Sociology of Immigration: Essays on Networks, Ethnicity, and Entrepreneurship*, New York: Russell Sage Foundation.
- and R. L. Bach, 1985, *Latin Journey: Cuban and Mexican Immigrants in the United States*, Berkeley: University of California Press.
- and A. Stepick, 1993, *City on the Edge: The Transformation of Miami*, Berkeley: University of California Press.
- Roth, J. H., 2002, *Brokered Homeland: Japanese Brazilian Migrants in Japan*, Ithaca: Cornell University Press.
- 田嶋淳子, 1998, 『世界都市・東京のアジア系外国人』学文社.
- Tilly, C. and C. H. Brown, 1967, "On Uprooting, Kinship, and the Auspices of Migration," *International Journal of Comparative Sociology*, 8: 139-164.
- Waldinger, R. et al., 1990, *Ethnic Entrepreneurs: Immigrant Business in Industrial Societies*, Newbury Park: Sage.
- 渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編, 2003, 『都市的世界／コミュニティ／エスニシ

- テイ —— ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ集成』明石書店.
- Wellman, B., 1979, "The Community Question," *American Journal of Sociology*, 99: 1201-1231.
- Werbner, P., 1990, *The Migration Process: Capital, Gifts and Offerings among British Pakistanis*, Oxford: Berg.
- Wirth, L., 1934, "Urbanism as a Way of Life," *American Journal of Sociology*, 44: 1-24.
- Yoo, J. -K., 1998, *Korean Immigrant Entrepreneurs: Network and Ethnic Resources*, New York: Garland.
- Yoon, I. -J., 1997, *On My Own: Korean Businesses and Race Relations in America*, Chicago: University of Chicago Press.

(付記)調査にあたっては、多くのエスニック企業家にご協力いただいた。本稿は、梶田孝道、丹野清人、高橋幸恵の各氏との共同研究の成果であり、日本証券奨学財団及び松下国際財団による助成を使用している。記して感謝したい。

(ひぐち なおと・徳島大学総合科学部講師)